

書評

「環境学」入門

編者：藤原 和俊
 発行：日本経済新聞社
 定価：1,700円（本体価格）
 評者：齋藤 雄志（専修大学経営学部教授）

本誌の読者である、エネルギー・資源学会の会員は程度の差こそあれ分野の差こそあれ、エネルギー・資源問題の実務家・専門家・研究者である。そのような立場の人々が最初この本を手にとったとき、この本に対しては、日頃接する多くの報告書や専門書とは違った印象を受けるに違いない。専門家の求める本には、特殊なデータや技術的議論が記載されていたり、難しい数式が書かれていることが多い。本書は、表題から想像できるようにこのようなタイプの本ではない。しかし、単なる入門書でもないようだ。本書の執筆者である藤原氏は、多摩区役所に就職しごく最近まで建築行政に携わっておられた方である。それゆえ、狭い意味で専門家とはやや異なるが、本書は上記の専門家が書けないような視点の広さを持っている。

本書の特徴をまとめるとつぎのようになる。

(1) 環境問題を基本的問題から論じている。しかも内容の幅が広い。本書の記述の中には、一見当たり前であるが、セクショナリズムに陥っている通常の専門書が論じることを避けている問題が多く含まれている。本書では、環境問題の原因者である

人間の行動から説き起こし体系的に環境問題の哲学を論じているといってもよいであろう。

(2) 本書は、「人間を捉えなおす」、「人間活動」、「負荷的な人間活動と環境変化」、「人間社会への影響」、「2通りの解決策」、「来るべき未来社会」、「情報・意識・行動」という7つの章から構成されている。「2通りの解決策」の1つは、筆者が根治療法と呼ぶもので、人口増加抑制のように「問題解決のためには、負荷的な人間活動そのものを削減していかなければならない」とする立場であり、もう一つは、公害対策に代表されるように「問題となった人間社会への悪影響に焦点を絞り、悪影響の回避を念頭に置いて解決を図ろう」とする立場である。「2通りの解決策」は本書の議論の重要な結節点である。

(3) 本書のもう一つの良いところはわかりやすい記述がベースになっている点である。バランスがとれており、整合性もある。本書の記述内容には執筆者の長い思考の後が見える。

(4) 一方、記述にはシステム工学的な雰囲気がある。これは本書をわかりやすくしている要因の一つである。執筆者が建築関係の仕事をしておられたことによる。文章も図もわかりやすく含蓄がある。

(5) 文系の環境学の教科書にも向いている。広い視点で環境問題を適切に論じた本はあまり多くないが、本書は、環境問題を基本から考える上で大変良い本であり、ゆっくり考えながら執筆者の考えを追ってみたいという気持ちがあく。

協賛行事ごあんない

「第19回光がかかわる触媒化学シンポジウム」

〔主催〕触媒学会「電子または光子のかかわる触媒研究会」

〔協賛〕日本化学会、高分子学会 他

〔日時〕平成12年6月14日（水）

〔会場〕東京工業大学・百年記念館

（目黒区大岡山 2-12-1）

〔参加費〕一般4,000円、学生2,000円（当日受付）

〔申込先〕〒226-8501 横浜市緑区長津田町4259

東京工業大学生物工学科 大倉一郎

TEL 045-924-5752

FAX 045-924-5778

e-mail iokura@bio.titech.ac.jp